Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語の雑談において用いられる記憶の心的述語の相互行為分析
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76611
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　千々岩　宏晃　　）	
論文題名	日本語の雑談において用いられる記憶の心的述語の相互行為分析

論文内容の要旨

本研究は、日本語の雑談において用いられる、「覚えている」「忘れた」「～の記憶がある」などの、記憶概念と関わる心的述語の研究である。これらを「記憶の心的述語」と称する。本研究では、会話分析の手法を研究手法として用いることで、これらの心的述語が、相互行為の中でしばしば起こる各種のジレンマへの対処の資源となっていることを示す。

本研究ではまず、記憶の心的述語の使われ方の記述が、認知主義的な視座からは困難であることを示す事例を紹介し、会話分析が手法として用いられる必要性について論じる。このような認知主義的な記憶観への抵抗は、1950年代から、デカルト主義に対抗する目的において、特に日常言語哲学のフィールドにおいて試みられており、“覚えている”などの心的述語が、心的な行為を示すのではなく、“達成”や“出来事”を表していることが強調されてきた。日常言語に焦点を当てた論述から、「心的過程」や「記憶の痕跡」という認知主義的記憶観への抵抗が試みられてきたのである。

その後、2000年代にかけて、エスノメソドロジー・会話分析、ならびに言説心理学の分野において、特に会話の中での記憶概念についての研究がなされた。一方で、これら二つの分野は、記憶を認知的な概念として解釈するかどうかでたびたび論争を行っており、合意には至らなかった経緯がある。本論で行った自然環境で起こるデータを分析・記述する研究は、データを中心に記述を行うことで、研究意義を持つ。

本研究は、電話会話と対面で行われた雑談を録音・録画したものを分析対象とする。これら録音・録画は文字起こしされ、135の断片が参与者の指向に基づいて分析・記述された。分析・記述には、会話分析の方法を用いた。

結果として、記憶の心的述語には4つの相互行為上の使用があることを示した。それらは、「進行性の調整」、「同調・同定」、「抵抗」、「不可能を示すこと」の4つである。これらは、会話上で起こる「進行性の遅延」、「参与枠組みの相違」、「行為が協調性を欠くこと」、「相手の発話の前提に応じられないこと」、それぞれのジレンマに対処する手立てになっている。

まず、「[人名](って)覚えてる?」等の形式で用いられる心的述語は、前置き連鎖として後に起こる本題行為(例えば噂話)をニュースとして受け止めることを保証するものとして用いられている。これは、進行性の調整であり、遅延の可能性を低めることに貢献している。

また、「Vた記憶がある」等の形式で用いられる記憶の心的述語は、参与フレームの再設定を行い、共通の経験を持つ物として、同一の参与フレーム化において同調することに用いられている。この使われ方は、同調を示す際の参与フレームの相違を解消することに用いられるのである。

さらに、記憶の心的述語は「すごい覚えてる」等の形式で、根拠の提示による抵抗を行う使われ方を持つ。また、別の文脈では、「忘れちゃった」などは、『確かに情報はあった、しかし今はない』という「身代わり」の情報源として用いられる。この用法は、認知主義的な記憶観と背反する。なぜなら、忘却は情報の欠如を表すはずであるが、相互行為においてはそれさえも根拠として用いられるからだ。

そして、さらに記憶の心的述語は、「N忘れた」「N覚えてない」等の形式で用いられ、非選好応答として状況的不可能を示すことに用いられる。ここでは、他の参与者の直前の行為を否定しながら、しかしその妥当性を容認することに用いられている。

これらの分析・記述から、記憶の心的述語は会話上のジレンマを解消する際に用いられていると結論付けることが出来る。このような記憶観は学術的に新規性を持ち、また、認知主義的な記憶観とも異なる点が明らかになった。

本研究が行った相互行為上の記憶の心的述語の解明の研究は、さらに他の心的述語や類似表現の研究や、記憶観への適用と再考、他の言語への応用などの研究に広がりを持つものである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　千々岩　宏晃　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	筒井　佐代
	副 査　教授	真嶋　潤子
	副 査　教授	中田　一志
	副 査　文学研究科 教授	マシュー・バーデルスキー
	副 査　京都工芸繊維大学 准教授	伊藤　翼斗

論文審査の結果の要旨

本論文は、「忘れる」「覚えている」「記憶にある」「思い出す」等の記憶の心的述語を用いた発話が、日本語の雑談において参与者にどのように用いられ、それによってどのような相互行為を行っているのか、その方法を系統的に解明することを目的とした実証的研究である。従来、認識論哲学や実験心理学、脳科学などにおける認知主義的記憶観においては、記憶研究の基盤として「事実に対して記銘・保持・想起/忘却といったプロセスが心的に/脳内で行われること」を前提とし、それが言語使用の背景にあるとしてきたが、会話分析研究においては、そのような前提への抵抗が試みられてきた。本論文は、後者の流れを汲み、会話という相互行為の中で記憶に関わる心的述語を用いた発話を観察することによって、それらの発話が単に「記憶」というものの脳内での有無や状態を述べているのではなく、会話で発生する様々なジレンマに対処するという行為を行っていることを、実際の会話データからの多くの事例を分析し例証している。従来、日本語の会話分析研究では、「えっと」「あのー」など想起や言葉探しに関わる研究はある程度存在するものの、記憶の心的述語の使われ方に関する研究は未だ少数である。本論文は記憶の心的述語に絞り、「思い出す類」「忘れる類」「覚える類」「慣用表現類」「記憶類」に分類される様々な言語形式を一括して扱った研究である点で、独創性のある先駆的研究であると言える。

本論文の学術的な位置づけについては、第2章で、1950年頃から近年に至るまでの会話研究における「記憶」概念の研究が4つの学派に分けてまとめられ、認知主義的記憶観に対して抵抗してきた経緯について詳述されており、広範な記憶研究の論争の歴史が充分に踏まえられている。ここでは、特に会話分析研究の核となるデータの記述において、どのような用語を用いて心的述語による発話を記述することが妥当かについて論じられており、本論文は、単に記憶の心的述語という語彙の使用についての研究ではなく、これらの語彙を用いた相互行為をどのように研究するべきかという研究の枠組みについて問い直す意欲的な研究として高く評価できるものである。

本論文では、43時間分の雑談会話データの録音・録画とそのスクリプトを用いて、135件の事例を収集している。分析には、会話分析の手法を用いて、それぞれの発話が会話のどのような位置で発話され、それによって参与者は何をしようとしているのか、またその前後でどのようなやりとりが行われているのかを詳細に観察、記述し、記憶の心的述語を使用した発話を、①「進行の調整」②「同定・同調」③「対抗・抵抗」④「不可能を示す」という大きく4種類に分類し、それら全体に共通するのは「会話上のジレンマへの対処」であると主張している。例えば①では「思い出したんだけど」「[人名]って覚えてる？」等の発話によって話題開始を適切にする、②では「覚えはある」「記憶がある」等で相手の発話の同定や同調を行う、③では「〇〇覚えてる」「一度見たら忘れない」等によって相手の意見への対抗・抵抗を示す、④は「忘れた」「覚えてない」等によって相手からの要求を却下したり弁解したりする、などの使われ方であり、いずれも、会話のその位置でその発話を行うことによって、直前の相手の発話が生む様々な相互行為上のジレンマへの対処を行っているということが主張されている。また、4つのうちの①はその後に起こりうる会話上の問題を指向し、②～④はすでに起きた会話上の問題に対処しているということも論じている。そして、これら4つの使われ方の分析を通して、記憶の心的術語を用いた発話は、単に記憶の状態を述べているのではなく、いずれも根幹的性質として、会話の破綻を防ぐことを行う協調的な行為であると結論づけている。

図表を用いて広範にわたる議論を理解しやすくする工夫が試みられているが、先行研究を扱う第2章が会話分析研究者以外の読者にとっては読みにくいのが難点である。また、「ジレンマ」「協調的」などの概念による包括的な結論づけに至るまでに、もう少し緻密な議論が必要だったのではないかという疑問も残る。しかし、本論文は、会話分析

研究における記憶研究の方向性を示唆する優れた研究であり、後継の研究者にとって参照すべき重要な論文となることは間違いない。以上のことから、論文審査担当者一同は、博士号を授与するのにふさわしい論文であると判断し、博士論文の成績を合格とした。